



特選

愛知川の清き流れもはるかにて
投網打ちいし夫若かりき

本庄町 田口洋子

(評) 昔はダムもなく清い水がつねに流れていた。その頃投網を打っていた夫は若く元氣であった。然し、今は老いて投網を打つこともない。なつかしいイメージが鮮明にある。

特選

歌い初め魔の指先に操られ
熟女一斉に「希望のささやき」

長浜市 奥長輝久乃

(評) コーラスを嗜む会の年初の活動。団員と指揮者の阿吽の呼吸が「魔の指先」に如実。五句の曲名も年始の活動、未来を彷彿させるようで効を奏している。

特選

あなたの絵高値で売れていますよと
耳打ちしたいゴッホの耳に

開出今町 掛田洋子

(評) 絵の価値よりも値段が優先する風潮は好ましいことではないが、ゴッホの絵は今人気が高い。生前に売れた絵は一枚だったという耳切り事件を起こしたゴッホだが、そうした歴史的背景を、現代の風潮で捉えた一首といえよう。

入選

かいつぶりのつぶら姿のオカリナを
諸手に包み吹く湖の歌

犬上郡多賀町 木村正子

(評) かいつぶりの形の「つぶら」、オカリナを包む手、湖の歌、と一首に流れるやわやわとした感覚がよく相応う詠みぶり。歌材と詠みが読者を歌へ誘うようである。

入選

白鳥は春の気配に急かさるるや
クルルクルルとシベリヤへ発つ

堀町 河分武士

(評) 春が来て帰らなくてはならない白鳥、急かされているさまが「クルルクルル」というオノマトペによって、生き生きとした作品になった。発想のユニークさの成果である。

入選

花ひらく忘れな草に父の顔
母の顔うかぶ君の顔うかぶ

犬上郡甲良町 村岸千鶴子

(評) 忘れな草の花が咲いて、先ず父の顔がうかび、次に母の顔がうかぶ。そして、最後に君の顔とは夫だろう。花の名前に合った作品で、今後も花が咲くと思うことだろう。

入選

みどりなす御髪の少し乱れます
吾が掌に目覚む古きひひなよ

長浜市 樋口満智子

(評) 古いお雛様を出して、これから飾ろうとするのであろう。髪に手を触れて整えながら出す間に次第に目覚めて行く雛人形が何ともいいたい。二、三句の表現が歌に変化をもたらしている。

入選

書き初めの「輪」の大書に飛沫く墨
この一年の先駆けとなれ

米原市 吉川 眞澄

(評) 書き初めに対峙合う作者の感慨が四つの言葉「輪」「大書」「飛沫」「先駆けとなれ」と畳みこむように繋がり、一首をリアルに際立たせている。

入選

あれこれとテレビに倣うダイエット
「個人差あり」を妻は見落とし

大藪町 外村 輝夫

(評) テレビのコマーシャルはいろいろとよいことを言う。妻は痩せ薬を買って使ってみたが、なかなかやせない。そう言えば、申し訳的に「個人差あり」と言っていた。それを見落としていたのだ。ユーモラスな一首である。

佳作

いずれかが一人になる日想いつつ
静かに吾は読経をする

東近江市 小林 清次郎

佳作

一面の緑滴る畑に出づ
茄子や胡瓜の素直さが好き

出路町 滝 ふみゑ

佳作

タブレットの操作たくみに魚屋の
娼店内見まはりてゐる

西今町 久永 朝子

佳作

笑うてた夕餉の後の居眠りも
他人事ならずと独り笑います

米原市 三輪 幸江

佳作

亡夫の席あけて淋しむ厨辺に
変らぬ朝日は家族をつつむ

犬上郡甲良町 村西 くに子



佳作
読み難き名前の増えし今の世に
君は子供を太郎と名付く

稲枝町山本正雄

佳作
コーヒーのカップに両手を温めつつ
地に届かざる雪を見ている

正法寺町高井豊

佳作
病室に君と向き合ふ夕餉どき
家守る弱音決して吐かず

栄町二丁目長谷川紀子

佳作
謡曲しダンスもするし囲碁将棋
されど我には晩酌が合う

平田町猪村幸夫

佳作
輪になりて話せばいつか黄泉のこと
「その節よろしく」と笑顔で別れる

小泉町牧之段シツ

佳作
短歌一首詠めぬいらだち隠しつつ
角度をかえて病夫の爪きる

長浜市山田静子

佳作
一輪車すいと踏む美琶ちゃんに
鋏の手を止め拍手を送る

東近江市田中和子

佳作
やれば出来る全校生徒のマスゲーム
反抗期の螺子ゆるぶ瞬間

松原町北川満代

佳作
妻の押すカートの籠に吾の好む
鮎ずしの見ゆ上に積まれて

芹橋二丁目古池陽彦

佳作
ひやかしのつもりに立ち寄る魚市場
値切るるうちに蟹を買はさる

長浜市柴田弥藏

佳作

冬野菜食みたる量の倍ちかく
花を咲かせて桜をみてる

南三ツ谷町 富江 美枝子

佳作

LEDに替へたる灯明あかあかと
菜種油の匂ひなつかし

平田町 小堀 由起

佳作

徳川の館いっぱいの雛まつり
豪華絢爛みな葵紋

地藏町 佐古 徳子

佳作

金ありとも手に入らぬ幸に困まるる
子ら孫よああ吾が妻よ

犬上郡多賀町 東岸 隆

佳作

鉢植ゑのシクラメンみな首を垂れ
水をほしがるわれも茶を欲る

犬上郡甲良町 上田 八重子

佳作

孫二歳何語のおしゃべり声発す
ブーブーバイバイ言葉の芽生え

米原市 島田 常喜

佳作

十余年看取りし母を見送りて
悲しみよりもほっと胸さする

米原市 日比 陽子

佳作

うかうかと過ぐる思いの明けくれに
山のさみどり花の満開

東近江市 古澤 貞子

佳作

いつか読まんと買い置きし
「老後の生き方」読まず老けゆく

米原市 成宮 建男

佳作

今でしよう流行ことばが胸えぐる
一途の夢を迷いて消して

長曾根南町 高 恵三郎

佳
作

病でも裏切られても歌手なれば
島倉千代子笑みて歌いき

近江八幡市 浅野 忍

佳
作

黄昏の牛舎に寄れば一斉に
異端の我を嗅ぎつつ唸る

稲里町 野瀬 善一

佳
作

水溜りに嬉嬉と戯る路地裏の
子雀どちは遊びが上手

長浜市 近藤 甚一郎

佳
作

この鳥が大鷓ならんと大浦川の
水澄みしなかあまた水浴ぶ

長浜市 粟津 久子

佳
作

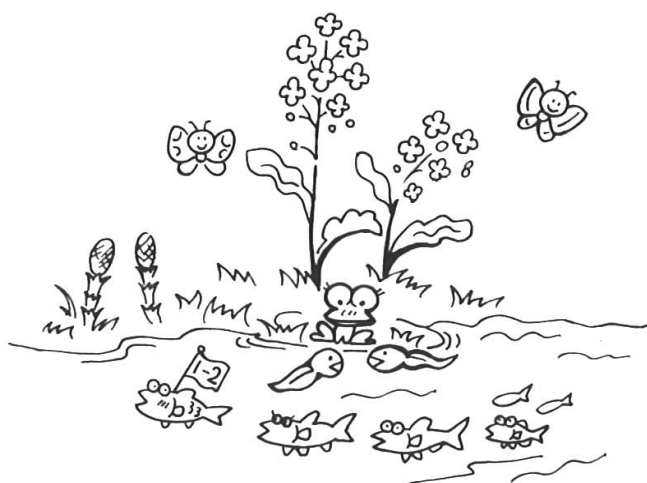
軽トラの荷台はみだすコンバイン
五キロの道程そろりと運ぶ

近江八幡市 出口 庄次

佳
作

早早と発ちし息子の部屋冷えて
コーヒーカーップひとつが残る

古沢町 大橋 しず



《総評》

応募者七十八名の二百二十九首、どの一首も作者ならではの感動の器です。選歌という緊張感に読み進むうち、いくつもの疑問に突き当たりました。

短歌一首を詠むことは、自己の表現活動でありながら、常に他者を意識するという実感を伴うのが常です。これは短歌に限らず、芸術一般のこと、「理解が得られるか」や「感動が得られるか」がそれです。しかし、短歌では感動した対象をありのままに詠んだり、詳しく述べたりすることは究極の目的ではありませんから厄介です。

現代を生きている感性豊かな一首を詠むために、先ず私たち自身が感度のよいアンテナであること、そして、柔軟で豊かな言葉の力、延いては人間力が求められているのだと自戒を新たにしましたことです。

木村光子

本年は応募者が少し減って残念であるが、高齢化などによるどうにもならない自然の現象だろう。さて、作品の質はどうかというところも日常の瑣末詠が目立つ。日常の生活をうたうのはいいのだが、もう一步突っ込んだ見方や追究がほしい。例えば三人が同じ花を見て詠んだとしても、夫々の作者のその時の感情は必ずしも同じではないはずだ。一人一人の差が作品に出るべきである。極端なことを言えば昨日の花と今日の花とは全く同じではない。それを見つめる眼をもつことが大切である。そして、いつも言うように「何をうたうか」、次はそれを「どう表現するか」である。つねに作歌にあたってはきびしい心でのぞむべきである。又、出来た作品については少なくとも三回は見直すことだろう。その時に結句によく似た表現がないか、「る」や「り」が多くないかを確認することだ。

小西久二郎

昨年一年、社会的にいろいろあつたように思うけれども、作品を見る限り、消費税値上げ、富士山、羽生選手、小保方さん、などが一首づつ見られる程度で、震災関係は一首にとどまっている。一般的には特に目新しい主題は見当たらなかった。

「たとえば一本の樗が立っていると。たまたまそこに樗が立っていたからではない。樗は、作者の内的な衝迫のよって無数の樹木の中か

ら選択された一本でなければならぬのだ。(佐佐木幸綱)「こんな言葉を改めて身にしてみよう。

誤字、言葉遣いの誤り、助詞の使い方、現在形であるべきところを過去形の使用など、例年よりも気になった。辞書を手許に置きたいものである。

島野達也

選者詠

散り散りのサイドミラーの欠片が

皐月の空の蒼を弾ける

木村光子

しろじろとすももの花の咲きさかる

わが逆縁にかかはりのなく

小西久二郎

行つた先々でよいことを言ふオバマ

総理がバラクと呼んだその人

島野達也